

全学的な体制で懇談会を開き 家庭での助言、支援のポイントを説明

関西大学

関西大学では、在学生の保護者組織「教育後援会」が、1966年度から大学と共催で懇談会を開催している。学長以下、教職員が全学を挙げて対応。大学が教育の実情を家庭に伝え、協力して学生を育てる体制が築かれている。

学部別懇談会で 教育方針を知らせる

「教育後援会」は保護者有志が発起人となり、1947年度に発足した。在学生の保護者は入学と同時に入会する。現在は事務局に大学職員が出向し、運営を担う。「大学と家庭の心のかげ橋」をモットーに、懇談会の開催の他、会報や保護者向けの大学ガイドを発行して大学の実情を伝えている。

懇談会は3種類ある。「学部別教育懇談会」は、「子どもが大学で何を学んでいるのかを知りたい」という要望に応え、教育後援会が大学に協力を依頼してスタート。2012年度で47年目を迎えた。全学および学部別の教育方針の説明や、成績についての個別面談、留学・奨学金等の各種相談会、学内施設の見学などを行う。2012年度の出席者数は、学生総数の約2割に当たる約5300人。あるマスコミ調査によると、この数は全大学の中でトップクラスだという。

下宿生の保護者のために1963年度から開催されているのが「地方教育懇談会」。現在は全国16都市で行われ、どの会場にも各学部1人ずつ、全学部



個別面談では所属学部の教員と話し合う。

の教員が必ず赴き、教育についての報告や個別面談を行っている。

1980年度から始めた「就職説明懇談会」では、3年生の保護者に、就職活動の流れや支援方法について説明する。1995年度からは2年生の保護者、2005年度からは1年生の保護者も対象に加え、大学のキャリア教育を理解してもらうためのセミナーを開催している。

総務局付課長、教育後援会出向の竹田かおる氏は「保護者の主な関心は、学業、就職、健康の3つと、昔も今も変わらない。3種の懇談会は、これらの関心事に対して大学が説明責任を果たす場となっている」と話す。

伝えるメッセージは 「目を離すな、手を離せ」

これらの懇談会の大きな特徴は、職員だけでなく教員も一体となった全学的な取り組み体制であることだ。「普段の学生の様子をよく知るのは教員」と、学部別教育懇談会の開催当初から、教員が保護者に対応しているという。教員には、懇談会に協力的な意識が根付いている。竹田課長は「日頃子どもを教えている教員と直接話すことによって、わが子の学生生活に対する不安は相当解消されるようだ」と話す。

全学体制で懇談会に臨むことによって保護者に伝えようとしているのは、「大学が、学生一人ひとりを大切にする姿勢」だ。竹田課長は「学生数2万8000人超の規模は、マンモス大学の

イメージを持たれがちだが、大学が細やかに『わが子』に関わっている様子を伝え、保護者に安心してもらっている」と話す。そして、「関大に任せておけば安心」という信頼感につながっているという。この信頼感が、大学の教育方針に対する賛同、協力してわが子の教育に関与する姿勢を引き出していると言えるのだろう。

例えば同大学は、1、2年生向けのキャリア教育の中で、卒業後の自分をイメージし、そのための準備をしておくよう指導している。大学では社会を見る目や自己分析能力を養っているが、同時に家庭でも、社会人に必要な礼儀やマナーを養ってほしいと伝えている。

そこで就職説明懇談会では、保護者が配慮すべき子どもの生活態度や、アドバイスする際の声の掛け方などを解説。在学生からは、「役立ったサポート、してほしかったサポート」の実例も示される。懇談会後のアンケートには、「大人として守るべきマナーについて、改めて家でのしつけが大事なことがよくわかった」「仕事観の養成は、家での手伝いから始まっていると聞いて勉強になった」「子どもと話ができるように、社会の流れをもっと勉強したい」などの意見が見られるという。

竹田課長は言う。「教育後援会では常に『目を離すな、手を離せ』というメッセージを伝えている。大学の指導を信頼してもらい、保護者だからこそできるサポートを促すことによって、学生の自立と成長を支援している」。